

MUSEUM INFORMATICS SERIES

8

博物館情報学シリーズ……

ミュージアム・ライブラリと
ミュージアム・アーカイブズ

水谷長志 [編著]

樹村 房

「博物館情報学シリーズ」の刊行にあたって

今日の博物館はもはや建物としての博物館ではなく、今や地球市民に情報を提供するシステムへと変身した。情報社会の到来によって、これまでの娯楽、教育、教養が変化し、多かれ少なかれ日常生活はインターネットの恩恵を受けている。きわめてアナログ的世界であった博物館・美術館がデジタル世界との関係を発展させ、ネットワークで結ばれている状況も普通の姿になった。その意味で、ネットワークは地球市民と博物館・美術館をつなぐ大きな架け橋である。

20 世紀の工業社会はコマンド、コントロール、チェックの 3C によって制御されていたといわれるが、21 世紀の情報社会はコラボレーション（協働）、コミュニケーション（双方向）、コンプリヘンション（共通理解）の 3C によって構成される社会である。博物館、図書館、文書館のもつ文化資源の共通性とピエール・ノラのいう「記憶の場」すなわちコメモラシオン（記憶・記録遺産）も博物館情報学のキーワードであろう。暗喩的にいえば、博物館情報学はカルチャー、コメモラシオンの本質的な 2C の基盤の上に、上記の 3C が組み合わせられて成立する学問体系といえるかもしれない。

現在、博物館界は情報に対してどのような取り組みをしているのか、今日までの到達点や研究成果を一度俯瞰してみようと「博物館情報学シリーズ」を企画した。以下、簡単に本シリーズの構成について述べておきたい。

第 1 巻は博物館情報学の基礎としての「情報資源と目録・カタログ」を中心にまとめた。第 2 巻は「コレクション・ドキュメンテー

ションとデジタル文化財」を取り上げた。これまでの博物館学の中で、正面から取り上げられてこなかった目録やコレクション・ドキュメンテーションを主題として真正面から取り上げたのは本シリーズの特徴であろう。第3巻は情報発信を重視しながら博物館のSNSを中心に「ソーシャル・ネットワーキング」について考察した。技術革新の最も速い分野であるため、本巻は内容のアップデートも必要であろう。第4巻と第5巻は博物館と来館者をつなぐコミュニケーションも情報によって成立する活動であるため、博物館機能としての「展示」活動と「教育」活動を取り上げた。第6巻と第7巻は、人工的に創りだす映像空間「プラネタリウム」と生態系施設「動物園・水族館」について焦点を絞った。これらの施設が如何にデジタルと関係が深いかが理解されるであろう。そして最後の第8巻は、博物館・図書館・文書館の連携の実践として「ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ」を中心テーマとした。本シリーズの中でも目玉の巻のひとつである。

記述にあたっては、各巻とも専門的な内容に踏み込みながらも新書レベルの平易さで解説することを心がけたつもりであるが、中には耳慣れない専門用語が登場することもあるかもしれない。本シリーズがひとつの知的刺激剤となり、批判・言説・修正・再考を繰り返しながら、博物館情報学がさらなる進化を遂げていくことを切に願うものである。

2016年12月

企画編集委員を代表して
筑波大学教授 水嶋英治

まえがき

昭和 27 (1952) 年、戦後、初の国立美術館として、京橋に開館した東京国立近代美術館 (1-2 章)。同年、一歩先んじて同じ京橋の地にブリヂストン美術館として開館し、2020 年、全面リニューアル、名称も改めて開館したアーティゾン美術館 (4 章)。30 年の長き準備室の時代をくぐり抜けて 2022 年の春、まさに本書を用意している今年、満を持して開館した大阪中之島美術館 (3 章)。そして、明治 5 (1872) 年、近代日本の文教施設のほぼすべての濫觴^{らんしょう}とも言える湯島聖堂大成殿の文部省博物館による博覧会から、今年、数えて 150 周年を迎えようとする東京国立博物館 (5 章)。

本書は、国立美術館、公立美術館、私立美術館、国立博物館のそれぞれに個性と語るに十分な歴史を有する 4 館のミュージアムの中のライブラリとアーカイブズについて、現場に軸足を置きつつ語られた報告である。

1 章は、東京国立近代美術館での経験を中心に本書のイントロダクションとなるべく「ミュージアム・ライブラリの 5 つの原理と課題」を述べたものである¹。

2 章は、東京国立近代美術館の本館のアートライブラリにおける取り組みと情報資源の組織化を中心に、M の中の L の様態を幅広く多様に、かつ手堅く述べたものである。

3 章は、大阪中之島美術館に設けられたアーカイブズ情報室での収集と公開をアーカイブズの定義に遡り、ミュージアムにおける機関と収集のアーカイブズの二面にわたって論考し、述べたものである。

4 章は、作品の歴史情報とその資料の集成行為を「ドキュマンタ

ション」の語に収斂させて、美術館の中の学芸部門における専門職能が、より深い連携をもって協同／協働する姿を述べたものである。

5章は、東京国立博物館の資料館の中においてその役割を異にする情報資料室と百五十年史編纂室と情報管理室から、それぞれにMの中での情報連携へのアプローチを述べたものである。

^{ミュージアム}館の中のライブラリとアーカイブズの連携は、〈内なる〉MLAのトライアングルであるが、かつて同じ構図をRLG/OCLCでの要職を務められたジェームズ・ミハルコ (James Michalko) 氏は、‘MLA under same roof’ という秀逸なキャッチコピーとイラストで示してくれた。本書においてもしばしば現れるMLAの連携の諸相は、まさに本書の果たす役割の眼目を示すものの中心にある。

MとLとAにはそれぞれに仕事の流儀とマナーがある。その拠って立つ原理は、curatorshipであり、librarianshipであり、archivy²と呼ばれるものである。その原理には当然のことながら差異がある。それぞれがこの原理に則りつつ、かつ相互に連携することが、今日のM・L・Aの可能性をさらに開き、そこにいっそうの愉悦があることをお伝えできれば幸いである。

2022年9月

編著者 水谷長志

引用参考文献・注

1：水谷長志「ミュージアム・ライブラリの原理と課題：竹橋の近代美術館での30年から伝えられること／伝えたいこと」『現代の図書館』57(3), 2019, p.107-117を改題して再掲。

2：Dictionary of Archives Terminology, SAA, archivy. <https://dictionary.archivists.org/entry/archivy.html>, (accessed 2022-07-03).

ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ
もくじ

「博物館情報学シリーズ」の刊行にあたって	1
まえがき	3

1章 ミュージアム・ライブラリの原理と課題 —— 竹橋の

近代美術館で学んだ5つの命題から	(水谷) 11
はじめに —— 5つの「命題」から学んだこと	11
1.1 ARLIS ファウンダー, TF の命題から学んだこと (1) —— ^{co-operation} つながること	13
1.2 ARLIS ファウンダー, TF の命題から学んだこと (2) —— ^{diversity} 多様性	14
1.3 アメリカの AML の先駆者, JW の一生から学んだこと —— ^{one person librarian: OPL} 一人図書館員の悩みと矜持	17
1.4 NAL, V&A の館長 JvW との対話を通して学んだこと —— なぜ, ARLIS/Japan ではなかったのか?	22
1.5 AL & AA, MoMA 館長 CP の問いかけから学んだこと —— 部分と全体: あるいは ^{artels} 分担 / ^{monoliths} 分散と集中	26
おわりに —— IFLA という傘のもとに	31

▶コラム1 ^{アート・ビブリオグラファー} 美術書誌編纂家という生き方 (水谷)	35
---	----

2章 ミュージアム・ライブラリ ————— (長名) — 40

2.1 東京国立近代美術館アートライブラリを事例に 40

- 2.1.1 はじめに 40
- 2.1.2 東京国立近代美術館について 44
- 2.1.3 東京国立近代美術館アートライブラリについて 48
- 2.1.4 アーカイブ 59
- 2.1.5 美術図書室のネットワーク 69
- 2.1.6 おわりに 70

2.2 情報資源組織化の流れ 71

- 2.2.1 はじめに 71
- 2.2.2 情報資源組織化の目的と意義 71
- 2.2.3 図書 82
- 2.2.4 展覧会カタログ 85
- 2.2.5 雑誌 90
- 2.2.6 非図書資料 97
- 2.2.7 おわりに 98

▶コラム2 展覧会記録の利活用 (長名) 102

3章 ミュージアム・アーカイブズ ————— (松山) — 108

3.1 ミュージアム・アーカイブズとは何か 108

- 3.1.1 アーカイブズの定義 108
- 3.1.2 SAAとミュージアム・アーカイブズ・ガイドライン 114
- 3.1.3 ミュージアムの活動記録を管理する 121
- 3.1.4 レコード・マネジメントとアーキビスト 127
- 3.1.5 コレクションとしてのアーカイブズを管理する 129

3.2	ミュージアム・アーカイブの実践	133
3.2.1	方針	133
3.2.2	評価・選別・収受	135
3.2.3	処理・保存	137
3.2.4	公開	149
3.3	ミュージアム・アーカイブズの普及のために	154
3.3.1	デジタルアーカイブズ・スペシャリストの育成	154
3.3.2	おわりに	156
▶コラム3	アーカイブの実務を学ぶ（松山）	171
▶コラム4	国立美術館におけるデータ公開・利活用（岡本）	178
4章	ドキュメンタシオン	
	—— 作品の歴史情報とその資料の集成 ——（黒澤）	186
4.1	イントロダクション	186
4.2	ドキュメンタシオンとは	189
4.2.1	フランスの美術館における「ドキュメンタシオン」	189
4.2.2	博物館学における「ドキュメンテーション」との 関わり	193
4.2.3	「コレクション・マネジメント」との関わり	195
4.3	作品の歴史情報とその資料とは	197
4.3.1	来歴	198
4.3.2	展示歴	200
4.3.3	文献歴	201
4.4	事例紹介	203
4.4.1	オルセー美術館	203
4.4.2	オランジュリー美術館	206

4.4.3	国立西洋美術館	210
4.4.4	アーティゾン美術館	214
4.5	まとめ	225

▶コラム5	国立国会図書館における博物館・美術館刊行物（曾木）	231
-------	---------------------------	-----

5章 ミュージアムの中の情報連携 ————— 236

5.1	なぜ MLA 連携は AM (L+A) から始まるのか？ ——「作品の「生命誌」を編む」をめぐって——（水谷）	236
5.2	東京国立博物館資料館と情報連携事例（山崎）	241
5.2.1	東京国立博物館の歴史	241
5.2.2	資料館概要	242
5.2.3	内部の MLA 連携事例——資料館の立場から	247
5.2.4	課題	251
5.3	東京国立博物館百五十年史編纂事業に関わる活動と 情報連携事例（小野）	253
5.3.1	東京国立博物館百五十年史編纂室について	253
5.3.2	百五十年史編纂室の活動	254
5.3.3	百五十年史編纂室の保管資料と活用状況	258
5.3.4	内包的 MLA 連携事例——編纂事業に向けた 博物館活動記録の情報資源化という観点から	262
5.3.5	課題	263
5.4	東京国立博物館における情報連携事例から見る ミュージアム情報の流通（阿児）	264
5.4.1	ミュージアムにおける情報とその連携	265
5.4.2	内包的 MLA 連携	270
5.4.3	外接的 MLA 連携	275

5.4.4 作品をめぐる情報の流通整備 276

▶コラム6 ジャパンサーチでの MLA 資料キュレーション (阿児)

281

あとがき ————— 287

参考図書案内 ————— 289

さくいん ————— 295

1 章

ミュージアム・ライブラリの原理と課題

—— 竹橋の近代美術館で学んだ 5 つの命題から

はじめに —— 5 つの「命題」から学んだこと

筆者は1985年4月から2018年3月末日に至る三十余年、竹橋（千代田区北の丸公園）の東京国立近代美術館のアートライブラリに勤務し、18年の春から現職に異動している。

途中、2年余、乃木坂（港区六本木）の国立新美術館設立準備室を併任したが、竹橋のアートライブラリがキャリアのホームであった。ただし、着任時にはライブラリをもたない、屋根裏に書架の並びだけのある企画・資料課資料係員、文部技官研究職が私の肩書であった。当時、つまりは独立行政法人国立美術館以前（2001年3月以前）においては、東京・京都・奈良の国立博物館同様、東京・京都の国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館は文化庁施設等機関である博物館相当施設であり¹、そこに働くいわゆる学芸員は技官（研究職）であり、事務官とは別に存在し、その世界にいまは筑波大学となっている図書館情報大学卒が紛れ込んだのだった。西洋史を図書館情報大学以前の大学で学んだが、美術史も美学も博物館学や学芸員資格も無縁のままに美術館勤務が始まったから、「門前の小僧」状態であった。

当時、公開の美術館の図書室は東京都美術館にある限りであり²、上野の東京国立博物館に資料館はあったが、国立美術館には美術書

と書架はあっても、公開のアートライブラリは1館とて無かったから、勢い、海外の art library の世界に知恵と情報を頼むほかなかったし、その動勢に同じく目を向けているらしい関係者も、のちにアート・ドキュメンテーション研究会（現学会, Japan Art Documentation Society, 1989-, www.jads.org, 以下 JADS）をともに立ち上げた当時都立中央図書館に勤務の H 氏と武蔵野美術大学美術資料図書館の O 氏を除けば、ほぼ皆無のように見受けられた。

現在の JADS や美術図書館連絡会（The Art Library Consortium : ALC, 以下 ALC, 美術図書館横断検索のためのコンソーシアム, alc.opac.jp）の活動, あるいは新規開館あるいは大規模リニューアルの美術館には、ほぼ必置で公開のアートライブラリが計画図面に落とし込まれている現況は、まさに隔世の感がある。時間は確実に過ぎた。

けれども、本稿を準備する過程で、その時間の中で感得した知恵と原理を振り返るならば、私のキャリアのごくごく初期に遭遇した英米の美術図書館協会（Art Libraries Society : ARLIS）のファウンダーや主要メンバーがかつて提示した命題や問いかけが、一貫して、直面する課題の解決における重要な参照系であり続けたことが改めて確認されるのであった。

ゆえに旧聞に属しはするが、本稿においては以下、5つの「命題」から学んだことを紹介するをもって、本書の序章——イントロダクション——となり、シリーズ最終巻の巻頭にふさわしからんことを願いたい。

1.1 ARLIS ファウンダー、TF の命題から学んだこと (1) ——^{co-operation}つながること

ARLIS は 1969 年に英国において産声を上げた。1972 年に北米に飛び火して、ARLIS/UK & Ireland (以下、A/UK) および ARLIS/NA (North America) (以下、A/NA) と名称し、ほかに ARLIS を名乗る組織は、オーストラリア・ニュージーランド、オランダ、北欧、ドイツ等に拡大し、上述の日本の JADS もまた、ARLIS を名乗りはしないが (その由縁は後述する)、ARLIS 類縁組織 (affiliated-organizations) として位置づけられており³、例えば、A/UK の機関紙 *Art Libraries Journal* (以下、ALJ)、A/NA の *Art Documentation* と JADS の『アート・ドキュメンテーション研究』の相互交換などの交流は継続されている。

ARLIS 誕生の直接のきっかけは、イースト・アングリア大学図書館の副館長であったトレヴァー・ファウセット (Trevor Fawcett, 以下 TF) が *Library Association Record* 誌に投稿した一通の手紙から始まる⁴、と定説されている。

主題専門をもつ図書館員、あるいは稀^{こう}観書など特殊形態資料の扱いを専らとする図書館員はその専門を同じうする者たちとの間につくられる互恵的協力の体制 (co-operation) のあることの有難味をいち早く理解するものである……ファイン・アートもアプライド・アートもすべて含んでの美術全般に携わる図書館員の間にも、早速にも互いのための協力組織をつくろうではないか。

との呼びかけが、同誌に載ったのが1968年3月。1969年、ARLIS創設大会を開き、同年10月に*Newsletter*を創刊、70年に22名の参加者によるセッションの開催、71年に会員名簿を刊行、72年の年次大会に北米からの参加者を得て、73年にはA/UKとA/NAの2つのARLISがアフィリエイトの関係を結んでいる⁵。

日本の美術図書館員の間にも、TFが主導し創設した美術図書館員による相互協力のネットワークの必要性が急速に高まったのが、1980年代の後半においてであった。そして、ARLISを名乗らないものの、1989年の発足時から、さまざまな経路においてJADSは、海外ARLISとの間にアフィリエイトの関係を築こうとしてきた。

1.2 ARLIS ファウンダー、TF の命題から学んだこと (2) —— ^{diversity}多様性

1985年の年が明けてようやく春からの勤めが竹橋の近代美術館に決まったとき、その準備はまずは図書館情報大学図書館に幸いにも架蔵されていたA/UKの機関誌*ALJ*（創刊1976年）と1977年にほぼ10年の蓄積をもってA/UKが満を持して刊行した初のモノグラフである*Art Library Manual*（以下、*Manual*）⁶に目を通すことであった。この*Manual*および後日、1985年にIFLA Publicationsシリーズの34冊目となる*A Reader in Art Librarianship*（以下、*Reader*）をともに編集し、自らも寄稿しているのが、*ALJ*の創刊エディタであるフィリップ・ペイシー（Philip Pacey, 以下PP）である。*Manual*のイントロダクションの冒頭に編者であるPPが引用していたのが、やはりTFのメッセージであった。

「完璧なるアートライブラリアン（The Compleat Art Librarian）」

と題する一文は、*Reader* にも復刻されていて、容易に当たれるのでぜひ全文をお読みいただきたいが⁷、PP が引いたのは、美術図書館員がまさに直面する困難とそれゆえの喜びを直截に語るメッセージから始まっていた。

美術図書館員の直面するもっとも顕著な困難は、扱う主題領域の圧倒的な広さである。おそらく、ほかのいかなる専門よりも、多種多様な資料とメディアを扱わなくてはならないだろう。印刷された文献資料のみならず、数限りないイメージとオリジナル作品の代替物に取り囲まれているのである。

編者である PP は、TF のこのメッセージを敷衍するかのごとくに、美術図書館が抱え、美術図書館員が対峙する資料とメディアの多様性を本書の章立てに反映している（表 1-1 参照）。

もちろん、*Manual* はインターネット以前であるとともに、デジタルアーカイブの姿もない時代の産物であるが、この章立てに現れる多様な資料群のうち、現在のアートライブラリから姿を消したものは、一つとして無いのである。さらにアートライブラリの多様性は拡張していることを改めて本書に立ち返って確認していただきたい。

Manual 以後、例えば、Jones & Gibson の *Art libraries and information services: development, organization and management* (1986)⁸ から、Benedetti の *Art museum libraries and librarianship* (2007)⁹ に至るまで、幾冊かの良き美術図書館学のテキストとなるものも出版されているが、アートライブラリの資料の歴史とそれにふさわしい扱いの基本となるものを知るには、この *Manual* の存在

表 1-1 *Art Library Manual* の目次

-
1. General art bibliographies (一般美術書誌)
 2. Quick reference material (一般参考図書)
 3. The art book (いわゆる美術書)
 4. Museum and gallery publications (美術館刊行物)
 5. Exhibition catalogues (展覧会カタログ)
 6. Sales catalogues and the art market (図書および作品の販売・オークション資料)
 7. Standards and patents (規格と特許資料)
 8. Trade literature (一般書籍目録)
 9. Periodicals and serials (逐次刊行物)
 10. Abstracts and indexes (抄録・索引誌)
 11. Theses (学位論文)
 12. Primary sources (一次資料, アート・アーカイブズを含む)
 13. Out of print materials (絶版図書資料)
 14. Reprints (復刻図書)
 15. Microforms (マイクロ資料)
 16. Sound recordings, video and films (録音・映像資料)
 17. Slides and filmstrips (スライド・フィルム)
 18. Photographs and reproductions of works of art (資料写真・複製美術品)
 19. Photographs as works of art (作品としての写真)
 20. Printed ephemera (チラシ・パンフレットなど散逸しやすい印刷物 [エフェメラ])
 21. Book design and illustrations (装幀・挿画資料)
 22. Artists' books and book art (アーティスト・ブック, 作品としての本)
 23. Loan collections of original works of art (美術図書館が館外貸し出しする作品)
 24. Illustrations (イラストレーション)
-

の意義はいまなお大きく、まだまだ継続するだろうし、立ち返るべき基本書であることをここに記しておきたい。

1.3 アメリカの AML の先駆者、JW の一生から学んだ こと —— one person librarian: OPL 一人図書館員の悩みと矜持

アートライブラリの相互協力のためのネットワークとその資料の多様性を維持保証するのは、あくまでもその当事者である美術図書館員を置いてほかにはない。one person librarian: OPL 一人図書館員であることの多いアート・ミュージアム・ライブラリ [アン] (以下、AML) にとって、とりわけ「門前の小僧」のごとき 1985 年の、当時の私にとっては、*Reader* に再録されているジェーン・ライト (Jane Wright, 以下 JW) が 1908 年の *Public Libraries* に寄稿した「美術図書館員の願い (Plea of Art Librarian)」に現れる以下の切々たる心情が強く共感された。

美術図書館は、広くは知られてもいけませんし評価されているとも言えません。加えて、学芸員やほんのわずかの学生の利用のために主として存在している、と言ってよいでしょう。しかし、この国で博物館や美術館がさらに発展するに従って、美術図書館の重要性はいよいよ増してきました……本や銅版画や写真やその他のいろいろに納められ、蓄積されてきた過去の豊穡な遺産を、より有効に利用者に供すること、これ以上に、図書館員にとって刺激的でワクワクする仕事がありますでしょうか。

このように AML の将来への夢と仕事の喜びを語る一方で、JW は、

美術館の図書室に勤めたことが私にとっては間違いではなかったか、と心の底で疑問に思うことがある……たしかに私が体験する世間はひどく限られたものでありますし、皆が言うようにどんな街であっても、美術に関心のある人間などその数はさしたるものではないのでしょうか……私は人知れず、一人で、助けてくれる人もなく、ごく限られた人々のために、多くのものを用意しながらそのうちのほんのわずかしを提供できないまま働いています。

という弱気もまた垣間見せていた。

2008年、A/NAの機関誌 *Art Documentation* に JW のこの一文が100年を経て、JW と同じシンシナティ美術館のライブラリアンによって紹介されている¹⁰。

これまで、「(JW が) インテリジェントでハードワーキングな人」と評されてきたこと、JW の「願い」が、OPL のミュージアム・ライブラリアンからの歴史的にも最初の呼びかけとして、たびたび、引用されてきたと書かれていた。

International Bibliography of Art Librarianship をまとめたパウラ A. バクスター (Paula A. Baxter) は、この「願い」の解題において、「ジェーン・ライトによるこの美術図書館員のミッション・ステートメントは予言的 (prophetic) ですらある」と述べていた¹¹。

なぜこのように JW の「願い」は美術図書館の文脈で飛びぬけて高い顕彰を得てきたのだろうか。歴史的に嚆矢ということはたしかにあるだろうけれど、想像するに、いずこの AML でも、そこに働く OPL は、JW とまったく同じ感慨を、一度はもってきたに違いない。すでに美術館の中に公開のライブラリがあることが、相当程度

に一般化した現代にあっても、その思いに変わらないことは多いだろう。

この JW の「願い」を JADS の『通信』に全文を翻訳した由縁にも通底するのだが、OPL という事態が AML の宿命的側面の一つであることは、改めて確認しておくべき重要事である¹²。

JW は、1908 年にこの「願い」を寄稿して間もなく、シンシナティの美術館からプリンストン大学の美術・考古学部の博物館・図書館に異動した。そこでは、多分、OPL ではなく、シンシナティでの嘆きもなかっただろう。

1929 年 6 月 8 日の *The New York Times* の計報欄は、‘Miss Wright, Expert on Art, Curator at Princeton University Museum’ が長いヨーロッパ漫遊の旅からの帰国の途上、パリにおいて客死したことを報じていた。

先に紹介した A/NA の *Art Documentation* 誌の記事には、1907 年、シンシナティ美術館のライブラリ、天井高く、ギリシアのカリアティードも施された室内にたたずむ JW が右手奥に小さく写し込まれている（図 1-1）。その姿からは、『パリのアメリカ人』というよりも『旅情』のキャサリン・ヘップバーンが演じたジェーンを思い起こしてしまう。が、いずれにせよ、AML の先駆者としての JW の「願い」はいまなお生き続けているということであろうし、その願いに込められた「予言」が当たっているか否かは、いまこそ問われているということなのだろう。

現状のミュージアム・ライブラリの「人」の課題は、以下の章において触れる「空間」や「資料」の課題と並んで、大きな陥穽あるいは変え難い特性を抱えている事実に触れないわけにはいかない。

東京国立近代美術館の本館にあるアートライブラリは、現在職制

付記

本稿は、特集「博物館・美術館の図書室をめぐって」(『現代の図書館』57-3, 2019) 巻頭拙稿の標題などに一部加筆修正したものである。再録掲載をご許可くださいました日本図書館協会ほか関係各位に感謝いたします。

引用参考文献・注

- 1 : 2007年に国立新美術館が、2018年に国立フィルムアーカイブが新規開館し、独立行政法人国立美術館は6機関となり、いずれも図書室を有し、後述のALCへも京都を除き参加している(2019年9月23日時点)。
- 2 : 野崎たみ子「美術図書室の四半世紀」『美術フォーラム21』(3), 2000, p.76-79.
- 3 : <https://www.arlisna.org/about/affiliated-organizations>, (accessed 2019-09-23).
- 4 : Fawcett, Trevor, ART LIBRARIANS, *Library Association Record*, March, 1968, reprinted in 5).
- 5 : Penny Dade comp, *ARLIS at 40: a celebration*. London: ARLIS/UK & Ireland, 2009. ちなみに2019年はA/UKの誕生50周年にあたる。
- 6 : Pacey, Philip ed., *Art Library Manual*, London: Bower, 1977, 423p.
- 7 : Fawcett, Trevor, The compleat art librarian, *ARLIS Newsletter*, No. 22, 1975, p.7-9, reprinted in *A Reader in Art Librarianship*. München: Saur, 1985.
- 8 : Jones, Lois Swan, and Gibson, Sarah Scott, *Art Libraries and Information Services: Development, Organization and Management*, Orland: Academic Press, 1986, 322p.
- 9 : Benedetti, Joan M. ed., *Art Museum Libraries and Librarianship*. A Co-Publication of ARLIS/NA and Scarecrow Press, 2007, 312p.
- 10 : Chapin Mona L., Jane Wright: Art Librarian. *Art Documentation*, Vol.27, No.2, 2008, p.56-58.
- 11 : Baxter, Paula A. ed., *International bibliography of art librarianship: an annotated compilation*. München: K.G. Saur, 1987, v, 94p.
- 12 : 水谷長志「ジェーン・ライト (Jane Wright, 1879-1929) ふたたび」『アート・ドキュメンテーション通信』(84), 2010, p.14-15. 全訳文の掲載: 『アート・ドキュメンテーション通信』(2), 1989, p.8-10.

あとがき

2013年6月17日、当時筑波大学図書館情報メディア系にいらった水嶋英治先生の研究室で初の編集会議が開かれました。第1巻『ミュージアムの情報資源と目録・カタログ』はほぼ順調に2017年の1月早々に刊行されましたが、第8巻になる本書『ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ』はとうとう初回の会議から約10年の歳月を経てしまいました。このような大幅な遅延はひとえに本書担当の編者の不手際によるものであります。

一つお詫びしなければならないのは、この書名にかかわらずミュージアムの全般に話を及ぶことが叶わなかったことであります。本書の全5章が美術館（東京国立博物館を含み）に偏ったことも、同じく、ひとえに編者の知縁知見にもとづいて、章構成を再編したからにほかなりません。

ただ、本編の5章にわたる3美術館と1博物館からの報告によります『ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ』の内容は、ミュージアムの館種の違いを超えて、十分に応用の利く知恵と実践に富み、参考とされるに足る問題意識に貫かれていることは保証いたします、と自負を持って言えるのであります。

かつて16世紀のコンラート・ゲスナーが『世界書誌 (*Bibliotheca universalis*)』をめざしたように、遍く資料へのアクセスを可能にするためには、その書誌的記述の網羅をめざさなければなりません。MoMAのライブラリのクライブ・フィルボットさんが指摘したように（本書 p. 27）、それは決して巨大な一館（モノリス, monolith）によって達成完結するのではなく、コレクションの大小にか

かわらず、多数の「ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ」という部分が連携し、結集することによってのみ達成できることなのだと思います。しかもミュージアムにアーキビストが居ること自体がまだまだ稀なことであるし、いまでも多くのミュージアム・ライブラリを支えているのが、ジェーン・ライト (p. 17) と同じワンパーソンのライブラリアンであることを思えば、ミュージアムのライブラリアンであれアーキビストであれ、個々人が部分のまま全体に連結する回路こそ必要であることは重ねて確認しておかなければなりません。

またミュージアムの中のライブラリとアーカイブズがより活性化するためには、ミュージアムの主役たるコレクションやその展示との間に橋を架け、知識と情報の往還が常にこの MLA のトライアングルの中で、血脈のごとくにフレッシュな流れと協働の志向が巡ることの肝要さも、繰り返し確認されるべきであることは、また同じであります。6 編のコラムもまたそのことを雄弁かつ多様に語っていませんでしょうか。

美術館から発せられた本書に続けて、さらに歴史・考古・自然科学ほか多様なミュージアムの中のライブラリやアーカイブズの実践と理念が語られる次なる一冊が新たに誕生することを切に願っております。それがまた「ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ」のさらなる切磋琢磨につながることでしょう。

2023 年 3 月

編著者 水谷長志

参考図書案内

(さらなる学習のために)

『図書館のしごと：よりよい利用をサポートするために』第2版，国際交流基金関西国際センター，2021.

- ▶美術館の中には展覧会準備に伴い収集されてきた資料をもとに，将来的に図書室の設置を検討しているところもあるのではないだろうか。しかし，美術館と図書館は社会教育施設という面では共通しているものの，運営方法含めて似て非なるものである。「何から手をつければいいのか……」，そんな方に手に取っていただきたいのが本書である。独立行政法人国際交流基金関西国際センターで「研修に参加する海外の司書，並びに海外で日本語資料を扱う司書が日本の図書館事情や図書館業務に関する知識を得て，業務に役立てる」ことを目的に編まれたものであるが，日本の図書館の仕事を学ぶための入門として，非常に配慮が行き届いた内容となっている。

Bierbaum, Esther Green. *Museum Librarianship*. 2nd Edition. McFarland Publishing, 2000.

- ▶博物館における図書館と情報サービスの企画・提供のための実用的なガイド。蔵書構築，書誌作成，スペースや設備要件，基本的サービス，拡張的サービス，博物館と図書館のパートナーシップ，執筆当時の電子リソースも網羅されている。著者はアイオワ大学図書館情報科学学部の名誉教授。初版は1994年出版，第2版では主に設立時や活性化のため，情報サービスの目標，およびそのようなサービスを達成するためのプロセスに重点を置いたものへとわずかにシフトしている。

Benedetti, Joan M. Ed., *Art Museum Libraries and Librarianship*. Scarecrow Press, 2007.

- ▶美術館に限らずあらゆる博物館の付属研究図書館を組織・運営するための実用的なガイド。管理，利用者サービス，自動化，セキュリティ，

[編著者]

水谷 長志 (みずたに・たけし)

金沢大学法文学部、図書館情報大学図書館情報学部卒業
独立行政法人国立美術館本部事務局情報企画室長／東京国立近代美術館企画課情報資料室長（～2018年3月末日）を経て、
現在 跡見学園女子大学文学部教授
主著 『図書館文化史』（勉誠出版、2003）
「極私的MLA連携論変遷史試稿」（『美術フォーラム21 = Bijutsu forum 21』no.35, 2017）
Art Libraries and art documentation in Japan, 1986-2012: progress in networking in museums, libraries and archives and the ALC: Art Libraries' Consortium. *Art Libraries Journal* (ARLIS-UK & Eire), vol. 38, no.2, 2013.
『MLA 連携の現状・課題・将来』（編著、勉誠出版、2010）

[執筆者]

長名 大地 (おさな・たいち)

一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程修了
博士（学術）
現在 東京国立近代美術館企画課主任研究員、情報資料室長
主著 『「言語社会」を想像する：一橋大学言語社会研究科25年の歩み』（共著、小島遊書房、2022）
「第二次世界大戦下におけるピエール・マティス画廊の役割：ヨーロッパとアメリカの美術交流を中心に」（『鹿島美術研究：年報別冊』no. 36, 2019）
「東京国立近代美術館における図書館業務：美術館と図書館との連携への展望について」（『大学図書館研究』no. 112, 2019）

松山ひとみ (まつやま・ひとみ)

アムステルダム大学大学院人文学研究科修士課程修了
MA (Preservation and Presentation of the Moving Image, Media Studies)
現在 認証アーキビスト、大阪中之島美術館アーキビスト（執筆時）
主著 「デジタル・ジレンマの行方」（『NFC ニューズレター』127号, 2016）
「海外博物館だより 美術関連資料の情報化：Getty研究所での実務研修から」（『博物館研究』vol.55, no.1, 2020）

黒澤 美子 (くろさわ・よしこ)

東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了
修士（学術）
現在 国立西洋美術館学芸課主任研究員、情報資料室長
主著 『挿絵本にみる20世紀フランスとワイン』（石橋財団アーティゾン美術館、2021）

「宇佐美圭司年譜、展覧会歴、文献目録」（『よみがえる画家 宇佐美圭司』東京大学駒場博物館，2021）
「石橋財団アートリサーチセンターライブラリーからの報告：ライブラリーセミナー紹介と美術系オンラインリソースの動向」（『現代の図書館』vol.57, no.3, 2019）

山崎 美和（やまざき・みわ）

図書館情報大学図書館情報学部卒業
現在 東京国立博物館学芸企画部博物館情報課情報資料室長
主著 『日本のアート・ドキュメンテーション20年の達成：MLA 連携の現状、課題、そして将来：予稿集+資料編』（共著，アート・ドキュメンテーション学会，2009）
「『守り伝える』を支える：東京国立博物館資料館の役割（特集 博物館・美術館の図書室をめぐって）」（『現代の図書館』vol.57, no.3, 2019）
「時間と空間を越えて伝え続けるために：東京国立博物館資料館紹介（特集 芸術と図書館）」（『専門図書館』no.303, 2020）

小野 美香（おの・みか）

学習院大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士前期課程修了
修士（哲学）
現在 東京国立博物館学芸企画部東京国立博物館百五十年史編纂室アシスタントフェロー

阿児 雄之（あこ・たかゆき）

東京工業大学大学院情報理工学研究科計算工学専攻修了
博士（学術）
現在 東京国立博物館学芸企画部博物館情報課情報管理室長
主著 「博物館・美術館にデジタル・アーキビストは必要か？」（『これからのアーキビスト—デジタル時代の人材育成入門』勉誠出版，2014）
「デジタルアーカイブ活用の技術：美術館・博物館の例」（『入門 デジタルアーカイブ』勉誠出版，2017）
「デジタルアーカイブと展示」（『展示学辞典』丸善出版，2019）

【コラム執筆者】

岡本 直佐（おかもと・なおすけ）

国立美術館情報企画室

曾木颯太郎（そぎ・そうたろう）

国立国会図書館

[企画編集委員]

水嶋 英治 (長崎歴史文化博物館館長)

水谷 長志 (跡見学園女子大学文学部教授)

田窪 直規 (近畿大学司書課程・学芸員課程教授)

田良島 哲 (東京国立博物館特任研究員)

若月 憲夫 (茨城大学人文社会科学部非常勤講師)

博物館情報学シリーズ…8

ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ

2023年4月22日 初版第1刷発行

〈検印省略〉

編著者 © 水谷 長志

発行者 大塚 栄一

発行所 株式会社 樹村房
JUSONBO

〒112-0002

東京都文京区小石川5-11-7

電話 03-3868-7321

FAX 03-6801-5202

振替 00190-3-93169

<https://www.jusonbo.co.jp/>

組版・印刷／美研プリンティング株式会社
製本／有限会社愛千製本所

ISBN978-4-88367-377-3 乱丁・落丁本は小社にてお取り替えいたします。